

本年度テーマ	主体的な学びや協働的な学びをととした学習のあり方について	事業内容	高知南：英語教育プログラムについて
--------	------------------------------	------	-------------------

【概要・目的】

本県におけるグローバル教育では、生徒が授業や課題研究に取り組む中で、論理的思考力や判断力、表現力を身につけるとともに、英語運用能力の向上を図り、将来グローバル人材として活躍できる資質を育成することを目的としている。生徒が学習を進めていく中で、どのような活動が必要で、それらをどのような手順で積み重ねていくのかについて、具体的に示して指導することが必要である。本年度は、学習の振り返りを中心に協議。

平成28年度の当初計画（P）

【本年度の到達目標】

- 「CAN-DO リスト」と「6年間のシラバス」を関連付け、系統的な指導をする。
- 1時間1時間の授業で生徒が「英語を用いて～することができる」となり、生徒がそれを実感できるよう、生徒との目標の共有、生徒が自身の現状を可視化できる手立てを工夫する。
- 「知識・技能」を活用し、英語で表現する力・理解する力を測るテストを実施する。

【本年度の取組内容】

- 各学年終了時の生徒の姿を具体的にし、「CAN-DO リスト」の到達を目指し指導する。付きたい力を意識した単元の目標と評価規準を設定し、系統的な指導をする。（「6年間のシラバス」に反映させ、短期・長期的なイメージをもって指導する。）
- 授業では単元や1時間のめあてを提示し、それに対する振り返りを行い、主体的・協働的な学びを目指す。生徒の自己評価や相互評価を取り入れ、生徒が自己の学びを客観視し、その後の学習につなげる。
- 指導と評価の一体化を図るために、妥当性のある筆記テスト・パフォーマンステストを作成し、生徒の学習状況の把握・授業改善に生かす。
- 生徒を対象に英語学習への意識実態・把握調査を年2回、また英語担当教員へ意識調査を年1回実施し、授業改善に生かす。

【第1回グローバル教育推進委員会でのご意見】

- 授業の中で目的をもって英語を使っていくことは英語運用力を付けていく上で必要であるが、知識・理解、それを活用して表現する力の定着を図る指導が必要ではないか。
- 「CAN-DO リスト」をもとに実現状況を確認するとは、どのような状況で、何が達成されて、何ができていないのかを具体的に挙げてほしい。
- 学習の振り返りをするために、明確なゴールを設定し、生徒全員が授業の目標が分かるような工夫をしてはどうか。
- 中学生に求める活動や目標を明確に示すようにしてはどうか。（以前に参観した授業では、対話する場面で聞き取ったことを書くことが中心になっており、相手に関心をもって何かを聞こうとか、やり取りしようという授業ではないものがあつた。
- 「CAN-DO リスト」が、知識の獲得のみに偏らないように注意すべきである。
- 学習方法のスキルをチェックするために、分析する力や情報を選択する力、考える力等を確認してはどうか。

平成28年度の取組状況（D）

(1) 「CAN-DO リスト」の到達を目指した系統的な指導

- 中高英語教員15名が、「CAN-DO リスト」と関連を図って、単元で「英語を用いて～することができる」という目標を設定し、単元の指導計画を立て、研究授業を実施した。
- 「6年間のシラバス」は平成27年度中学校入学生から年次進行で見直していくため、高等学校については現在の生徒とギャップがある。
- 中学校は、「聞くこと」、「読むこと」、「書くこと」の指導はほぼできているが、「話すこと」の即興でやりとりをする指導（対話、ディスカッション、ディベート等）については、「CAN-DO リスト」で設定した学習到達目標の達成を目指し、スモールステップで指導することが全体として不十分である。
- 教員の意識調査によると、単元や1時間の授業でゴールを設定しその指導をしているものの、CAN-DO リストとの関連を図った指導、評価規準に基づいて達成状況を評価することが十分でない。

■平成28年度高知南中学校・高等学校英語教育プログラム意識調査（教員対象）

- 調査の目的：**教員の授業改善への意識、教員による生徒の学習状況等を把握し次年度の研究に生かす。
- 調査対象：**英語担当教員（15名 中学校：4名、高校：11名）
- 調査時期：**平成28年度1月

項目	教員
単元の指導や1時間の指導において、バックワードデザインで授業を計画している	100%
CAN-DO リストを単元の指導に関連させる	53.3%
本時のゴールを達成させるための言語活動を設定する	93.3%
評価規準に基づいて、達成状況を評価する	60.0%
自分自身に変容があつた	85.7%
生徒に変容があつた	33.3%

(2) 生徒が自己の学びを振り返る手立て

- 日々の授業でも、1時間のめあてを「～することができる」の形で提示し、指導している。振り返りでは、ゴールに対して、生徒が自己評価や相互評価をできているときもあるが、計画していてもできなかつたり、振り返る視点を明確に示すことができていない。
- 生徒が授業で書く英文を授業者自身が構想してから指導した授業では、評価規準や生徒が振り返る視点を明確にして指導することができた。その結果、ゴールに達成できたと自己評価した生徒は93%だった。

課題と今後の取組（C、A）

課題

- 「CAN-DO リスト」の到達を目指した系統的な指導**
- 生徒が自己の学びを振り返る手立て**

- 授業者間で、単元の目標や指導内容、テスト内容の確認はできているものの、各学年の終了時に「英語で何ができるようになるのか」具体的な姿、及び評価規準の共有が課題である。そして、学年を超えて指導内容・生徒の様子を交流する時間をもち、系統的な指導を考えていく必要がある。
- 1単元・1時間のゴール設定、そのための言語活動の効果的な位置付け等、授業改善が進んできたが、「CAN-DO リスト」を単元の指導に関連させること、評価規準に基づいて評価することに課題がある。

(3) 筆記テスト・パフォーマンステストの改善

- パフォーマンステストで、生徒の「話すこと」の技能を適切に見取ることができるルーブリックを作成することが課題である。

★授業改善に向けた教科会の在り方

- 研究内容の進捗状況の確認や研究の方向性の共有を定期的に行うことができず、PDCAが十分でない。

今後の取組

- 「CAN-DO リスト」の到達を目指した系統的な指導**
- 生徒が自己の学びを振り返る手立て**
- 筆記テスト・パフォーマンステストの改善**

- 「CAN-DO リスト」と関連させた指導・評価規準に基づいた評価ができないのはなぜなのか、年度内にその原因を分析し、対策を検討していく。
- 「6年間のシラバス」にある「6年間のイメージ（目標）」を踏まえて、そして、ルーブリックの作成を通して、卒業時及び各学年の「CAN-DO リスト」で設定した学習到達目標の具体的な姿を共有する。
- 中学校では、段階的に英語力を付けることができるよう、「CAN-DO リスト」を質的な深まりという視点から見直し、平成29年度版「6年間のシラバス」に反映させる。
- 「CAN-DO リスト」で設定した学習到達目標の達成状況を客観的に測るテストの時期・回数を見直し、「6年間のシラバス」に適切に位置付ける。
- 生徒がゴールに照らし合わせて自分の成長を可視化できる場を適切に位置付ける。

★授業改善に向けた教科会の在り方

- 教科会で、定期的な研究の進捗状況の把握・次の取組の方向性の確認をし、組織的に研究を推進できるよう、来年度の教科会のもち方を年度内に決める。

本年度テーマ	主体的な学びや協働的な学びをととした学習のあり方について	事業内容	高知南：英語教育プログラムについて
--------	------------------------------	------	-------------------

【第2回グローバル教育推進委員会でのご意見】

- ・1時間や1単元のゴールとして、生徒がどんな英語を書いたり話したりすることを目指すのかを具体的に示してはどうか。
- ・教員が中学校3年修了時に「英語を用いて～することができる」イメージを共有する一つの方法として、過去の教育課程実施状況調査を活用してはどうか。
- ・生徒にゴールイメージを持たせるために、生徒がアウトプットしたもの等を蓄積していくと次の学年に生かされるのではないか。
- ・英語で書くことについては、間違ってもいいので、書くことに慣れさせることが大事ではないか。
- ・プレゼンテーション力を付けさせるには、日本語でも英語でも、繰り返しさせてみてはどうか。

平成28年度の取組状況 (D)

(3)筆記テスト・パフォーマンステストの改善

- ・夏季休業中・2学期初めに評価について研修・協議をし、筆記テストはコミュニケーションの視点、妥当性等から改善されてきた。パフォーマンステストについては、「話すこと」の即興でやりとりをする力を見取ることが不十分であった。
- ・中学校では、英語力調査（文部科学省）等を参考に、パフォーマンステストのルーブリックを作成中である。高校でもルーブリック作成の必要性は感じているが、具体的にはまだ進んでいない。

★授業改善に向けた教科会の取組

- ・教科会で、学習指導要領を踏まえた単元の目標設定、評価方法について協議し、授業改善の意識が広がっている。教員の意識調査によると、「授業改善の意識が高まった」と回答した教員は100%である。
- ・研究授業後の教科会では、授業者が授業の振り返りを報告し、質疑を行った。他教員からは、「授業について話し合う時間がもっとほしい」という発言があった。
- ・モデルを提示し、考えや気持ちなどを伝え合う、話したことや読んだことを書くという技能統合型の言語活動を取り入れ、総合的なコミュニケーション能力を高めるよう工夫しており、授業参観を通して、授業改善が進んだことを実感している。第2回英語学習への意識・実態把握調査によると、高校3年生は、高校2年生時と比べ、「英語の授業が楽しい」と答えた生徒は、10.9%上昇し、4技能の学習が好きな生徒も増えた。

項 目	高校2年時	高校3年
	(H27 第1回調査 8月末)	(H28 第2回調査 12月)
英語の授業が楽しい	44.4 %	55.3 % (+10.9%)
英語を聞くことが好き	52.3 %	57.4 % (+ 5.1%)
英語を話すことが好き	38.5 %	47.4 % (+ 8.9%)
英語を読むことが好き	48.2 %	55.2 % (+ 7.0%)
英語を書くことが好き	29.3 %	40.0 % (+10.7%)

- ・中学2年のある学級で「英語の授業を70%以上理解している」と回答した生徒は、11.2%上昇している。
(平成28年5月 56.7% → 1月 67.9%) 他学級は調査中である。
- ・英語科として、実践していることの検証（PDCA）が十分でない。

【平成28年度 到達目標】

学習の振り返りをし、学習者の習得状況を教員及び学習者にフィードバックする。

↓

自分で「課題を発見する力」、「課題を解決する力」、「考える力」を身に付けている。